

## 村上先生のご退職にあたって

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 堀林, 巧 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/34358">http://hdl.handle.net/2297/34358</a>

# 村上先生のご退職にあたって

金沢大学経済学経営学系長 堀 林 巧

今年3月に退職される村上先生が属す団塊世代は、復興期、高度成長期、経済大国化・バブル経済期、バブル崩壊後の定常経済期と続く戦後日本経済変容の中で生を営まれてきた。また、1960年安保、1968年の世界的スチューデント・ムーブメント(学生運動)、1970年安保など、集会・デモ・ストライキが日常風景である時代に青春を過ごされた。

1960年代後半の経済学部の看板科目は経済原論(理論)であり、経済原論は大抵の場合、マルクス経済学とケインズ経済学をさした。いずれも、経済を中心としつつも政治等を含む社会総体の把握を志向する経済学である。経済理論から研究生活を開始した者は多かったが、理論家への道は険しく、挫折を余儀なくされ、経済学の別の分野に移った研究者も少なくない。村上先生は、現在に至るまで経済理論研究を続けられ、多くの優れた業績を世に問うてこられた。村上先生が選択されたのはマルクス経済学である。日本のマルクス経済学には正統派、市民社会派、アナリティカル(数理的)・マルクス派、宇野派がある。村上先生の研究は宇野派の系譜に位置づけられる。

宇野理論は、「原理論－段階論－現状分析」の3段階論を基軸にしている。村上先生は、これまで8点の著書(単著)を刊行されているが、それらはこの3段階論のいずれかに分別される。マルクスが示した資本主義経済の原理的運動法則を批判的に継承発展させることをめざす「原理論」領域に属する先生の研究書には『景気循環論の構成』(2002年)など3点があり、「原理論」と「現状分析」を繋ぐ「資本主義の歴史的発展段階機構構築」をめざす「段階論的領域」の研究書には『資本主義国家の理論』(2007年)など2点があり、「現状分析」と関わる研究書には最新著『日本型現代資本主義の史的構造』(2012年)など4点がある。

村上先生は原理論から出発され、本学在職最後の年には現状分析の書を刊行された。本学在職最後の3年間には毎年研究書を刊行されたことに示され

ているように、村上先生は精力的で敬服すべき研究生活を送られた。研究に定年はない。先生が本学退職後も衰えることのない意欲で研究成果を発表されるであろうと確信している。

経済学経営学系(経済学部)の誰もが認めるように、村上先生は優れた学者であるばかりでなく、良き教育者であった。教育学部から経済学部に移籍された後、経済変動論の講義と演習(ゼミ)を担当された。講義受講者は多く、経済変動論ゼミは人気があった。さらに、村上先生は多くの大学院生(特に留学生)の主任指導教員も務められてきた。深い研究に裏付けられた学識のみならず、ユーモアに富み温かい人柄に惹かれ、村上先生の周囲に多くの学生・院生が集まったのであろう。

教務学生生活委員会委員長を務められるなど経済学類(経済学部)の管理・運営にも貢献された。学類会議(学部教授会)等での理路整然とした発言、筋が通らないと思われるような見解に対する説得的な反論に耳を傾けるスタッフも多かったであろう。「心にいつも喜びを満たしてくれるモーツァルトを聴きながら」(村上『現代日本経済の景気変動』御茶の水書房、2010年「はしがき」)研究室で執筆されている姿に加え、私の印象に強く残っているのは村上先生の「歩く姿」である。四季を通じ、出勤・帰宅の路は徒歩を貫かれた。歩きながら著書を構想し、思考を整理し、文章を推敲されたのであろう。

末尾ながら、経済学経営学系スタッフを代表して村上先生が長年にわたって経済学部並びに経済学経営学系の研究・教育・管理運営の全てにわたってなされてきた貢献に感謝し、ご退職後の村上先生のご健康とご研究の発展を祈るものである。